

氏名・(本籍)	須田智美(秋田県)
専攻分野の名称	博士(保健学)
学位記番号	医博甲第45号
学位授与の日付	令和6年9月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科専攻	医学系研究科(保健学専攻)
学位論文題名	Enhancing Nursing Students' International Competency Through Virtual Exchange Program: A Quasi-Experimental Study (バーチャル国際交流による看護学生の国際能力向上の検証：準実験研究)
共著名	Piyaorn Wajanatinapart, Ni Luh Putu Dewi Puspawati, Lisa Kerckhof, Sachiko Makabe, Anak Agung Istri Dalem Hana Yundari, Suparpit Maneesakorn von Bormann
論文審査委員	(主査) 教授 眞壁幸子 (副査) 教授 安藤秀明 准教授 長岡真希子

## 論文内容の要旨

### 研究目的

看護学生に対するバーチャル国際交流を開発し、バーチャル国際交流の教育介入により、参加学生の国際能力が向上するかを、対照群を設けて明らかにする。

### 対象・方法

本研究では、持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)を通じて、複雑な社会的要因を包括する健康課題に対応できるように、各国の社会文化的背景を学びながら議論できるバーチャル国際交流を開発した。ベルギー、インドネシア、日本、タイの看護学生を対象に、バーチャル交流教育概念モデルを用いた英語による遠隔プログラムを、2021年10月から2022年3月までの6ヶ月間、1回2時間のセッションを4回実施した。

国際能力を評価するために、2群事前・事後テストデザイン of 準実験研究を行った。介入群はバー

チャル国際交流に参加した4カ国の看護学生、対照群はバーチャル国際交流に参加しなかった学生であった。2群にバーチャル国際交流前後に、英語のデジタル質問紙を用いて調査を行った。質問紙の内容は、対象者の基本属性と国際能力を測定するためのSTRENCO能力評価尺度<sup>1)</sup>の6領域35項目であった。バーチャル国際交流の介入効果を評価するために、2群の6領域の国際能力（言語能力、異文化能力、グローバル・エンゲージメント能力、自己成長能力、国際的な学際的学習能力、デジタル能力）の平均得点を、反復測定分散分析、対応のあるt検定で分析した。本研究は、ビブス応用科学大学（承認番号：2021-52）、ウィラメディカバリ健康科学大学（承認番号：04.0557/KEPITEKES-BALI/XI/2021）、秋田大学医学系研究科（承認番号：2749）、スラナリー工科大学（承認番号：EC-64-151）の研究倫理委員会により承認を得た。

## 結 果

分析対象の介入群は27名（回収率93.1%）、対照群は26名（回収率76.5%）であった。年齢の中央値は19.0歳、性別は女性が47名（88.7%）、学年は1年生20名（37.7%）、2年生5名（9.4%）、3年生16名（30.2%）、4年生12名（22.6%）であった。国はベルギー12名（22.6%）、インドネシア19名（35.8%）、日本10名（18.9%）、タイ12名（22.6%）であった。国際能力では、異文化能力（ $p = 0.028$ , Partial  $\eta^2 = 0.12$ ）と自己成長能力（ $p = 0.018$ , Partial  $\eta^2 = 0.11$ ）において、群と時間の交互作用に有意差がみられた。群内比較では、介入群と対照群において、事後調査の平均得点に有意な増加がみられた項目が異なっていた。

## 考 察

バーチャル国際交流は、看護学生の異文化能力と自己成長能力の向上に効果的な手法であることが示唆された。実際の交流では、言語の壁によって共同作業が阻害される場面があり、それを乗り越えるために参加者は自発的な行動が求められた。自己の課題への挑戦と困難の克服を通じて、自己成長を遂げたと考えられる。また、SDGsを通して異文化を知ること、自文化の規範や信念を認識し、異文化能力を高めることができたと推測される。このような経験は、多様な文化的背景を持つ対象への看護に貢献できると考える。

しかし、利点とともに困難も存在する。バーチャル国際交流は、参加者の物理的・経済的負担を軽減し、過密な看護学教育カリキュラムでも実施可能であるが、従来の留学と同等の文化的発展をもたらすことは難しい<sup>2)</sup>という指摘がある。また国際能力は継続的なプロセスの中で培われるものであり、一度の経験だけでは十分な成果が得られない<sup>3)</sup>ことも指摘されている。将来的には、バーチャル国際交流を従来の留学や語学学習と組み合わせることで、継続的な国際能力の向上を促すことが求められる。

## 結 論

ヨーロッパとアジアを含む4カ国の看護学生が、SDGsについて意見交換を行うバーチャル国際交流は、国際能力を向上させるための効果的な国際交流プログラムである。世界的パンデミックによる渡航制限がある中でも、様々な文化背景をもつ対象に看護を行う上で重要な【異文化能力】と【自己成長能力】を向上させた。バーチャル国際交流は、従来の移動プログラムの身体的・心理的・物理的・経済的障壁に対処することができ、今後は短期留学とのハイブリット教育にも有益であることが示唆された。今後は、国際能力が向上した過程に焦点をあてて検証が必要である。

## 引 用 文 献

- 1) VIVES University of Applied Sciences, 2020. STRENCO Competency Assessment Tool for Generic Erasmus Competencies [online] Available from <https://strenco.eu/wp-content/uploads/2021/01/Manual-Generic-competencies-assesment-EN.pdf> (Accessed 2024-5-12).
- 2) Iskhakova, M., Bradly, A.: Short-term study abroad research: A systematic review 2000-2019. *Journal of Management Education* 46: 2 (383–427), 2022
- 3) Deardorff, D.: Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization. *Journal of Studies in International Education* 10: 3 (241–266), 2006

## 論文審査結果の要旨

本論文は博士の学位に値するものであると判断した。以下に詳細を記す。

要旨：2群事前・事後テストデザインの準実験研究デザインにより、バーチャル国際交流による看護学生の国際能力向上を検証した。ヨーロッパを含む4ヶ国にて持続可能な開発目標をテーマとして教育介入を行い、国際能力の中の「異文化能力」と「自己成長能力」が対象群と比較し有意に向上できることを解明した。

斬新さ：教育介入を開発し、4ヶ国で対象群を設けて効果を確認できたことは新規性が高い。世界的コロナパンデミックの中で教育を途絶えさせなかったのみならず、研究全ての過程において遠隔システムにて行ったことも斬新である。

重要性：保健学においてデジタルトランスフォーメーションが加速化されている中、本研究が研究にとどまらず今後の教育変革につながる一助となることである。

研究方法の正確性：国際共同研究として綿密な計画と運用を行い、分析や考察を多面的に行っている。様々な限界はあるが全体的に正確性の高い研究方法である。

表現の明瞭性：最終審査会ではとてもわかりやすい発表と質疑応答であった。特に他者に伝えるための図式化の技術が良質であった。論文においては一部、副査による指摘としての、新規性の強調、使用した尺度の妥当性、各国の特徴などに関して、追記・修正を行い、最終的には明瞭な表現となった。